

講座

フロイトは何を遺したか

—フロイトの復権(1)—

布施 裕二

【キーワード】 精神分析療法, 精神装置, 本能論, 超自我

はじめに

ジークムント・フロイト(1856-1939)の名前は、現代の精神医学であまり語られなくなっている。それよりも「脳科学」という名の下に、脳の実体的なあり方に焦点を当てられた研究が、精神医学の主流になっている現実がある。「統合失調症」「うつ病」「パニック障害」や「老年期痴呆症」に至るまで、脳の神経伝達物質の異常という観点から、その発症メカニズムが研究されている。

その一方で、世間でマスコミを騒がせる残虐な事件が起きるたび、PTSD(post traumatic stress-disorder 外傷後ストレス障害)という言葉が飛び交っている。事件の被害者などが、心に大きなショックを受けて、なかなか以前の日常生活に戻れない状態に対して、その名前がつけられケアを受けている。そこでは事件の記憶がなかなか消えずに、恐怖や不安に襲われて、夜も悪夢にうなされたりし、身体的には頭痛・食欲不振・身体のだるさなどが続いていく。それには「心のケア」が、大事とされている。

このように、精神医学の分野では脳の実体的なあり方が、世間では心のあり方が問題にされている現実がある。そこでは「脳と心」とが統一されて扱われていない。特に精神医学の分野では、皮肉なことに「精神」ということが、それ自体としてまともに扱われていないで、脳の機能にだけ目を向けている現実がある。¹⁾

けれども、精神医学の歴史を見ると、精神のあり方を脳との関係を保ちながら、それ自体として究明した先達が存在したのであり、その偉大な先達の一人が、フロイトである。彼はウイーン大学で脳の研究を行い、当時の「脳神話」と言われる、全ての精神の働きを脳から説明しようとする研究の流れの中に身を置きつつ、医院開業後は主にヒステリー患者の治療に当たって、彼らを診療する中で、当初は「心的外傷」に目を向け、それを取り除くことに専念し、その後は精神を「発達段階」という観点から見えていき、「精神分析療法」という治療法を確立していくまでになった。

この意味で、現在の脳研究にも、PTSDという概念にもつながるものを、フロイト理論は包含していると言える。それゆえ、このような現代において、改めてフロイトを取り上げ、彼が一体何を遺したのかを究明することは、大いに意義があると言える。

『精神分析学概説』から学ぶ

これはフロイト最後の論文である。1938年にロンドンで書き始められたが、数週間で未完のままに終わり、フロイトの死後1940年に発表された。この意味で、フロイト理論の集大成と言えるものであり、彼が精神の究明の末に辿り着いた地点が、そこに示されている。もちろん、これを理解するためには、それまでの彼の研鑽の過程を辿る必要があるのだが、まずはこの終着点とも言える論述を見ることから始

めていき、その理解に必要な限りにおいて、それ以前の著作も参考にしていく。

ここでは「フロイト著作集9 技法・症例篇」(小此木啓吾訳 人文書院)に収められているものをテキストに用い、引用の際にはそこでの頁数を示す。

まず初めに、この論文の全体の構成を示したい。

序言

第一部 精神の本質

第一章 精神装置

第二章 本能学

第三章 性的機能の発達

第四章 精神の性質

第五章 夢解釈に関する説明

第二部 実地上の課題

第六章 精神分析技法

第七章 精神分析学的研究の一つの見本

第三部 理論的収穫

第八章 精神装置と外界

第九章 内界

ここでは、人間の精神のあり方について、まず「精神の本質」と彼が捉えるものに目を向け、次に、彼が創始した「精神分析療法」について述べ、更に、それらから何が得られたかについてトータルに説くとしている。「序言」では、次のように述べる。

「精神分析学の学説は、測りしれないほど多くの観察や経験を基礎にしていて、自分自身および他人についてのこの観察を繰り返す者だけが自分なりの独自の判断を下す大道に踏み込む資格を得るのである」(156頁)

ここで大事なのは、「自分自身および他人についてこの観察を繰り返す者」という点で、そのような実践をしたことのない、単なる外部からの批判では

なく、それを行って見た者だけが、その学説についての「独自の判断」を下せるというのである。これは「理論の再措定」ということにも関わってくる。すなわち、フロイト理論を改めて捉え返してみても、そこから学ぶべきことは何か、そこで足りないものは何かという検討を、「再措定」として行うなら、自らが同質の実践を行わねばならないということである。

さて、「第一部 精神の本質」として、五つの章が設けられている。本来「精神の本質」というのは、「精神とは何か」を、その根本から説くことである。「精神の構造」を包含したものである。けれども、この章立てを見る限り、フロイトが精神について捉えた知見を、精神にとって本質的と思われる中身を整理してまとめたものが、「精神の本質」として説かれているようである。

今回は、彼が人間の精神についてどのように捉えていったのかに的を絞り、それを検討していくことで、彼の実践の意義を探っていく端緒にしていきたい。

第一回 フロイトの「精神装置」とは何か・精神をどのように捉えたのか

「われわれは、精神生活に空間的拡がり多数の部分から成る総合性という性格を与え、精神活動をこのような特徴をそなえた一種の装置の機能の現れであると仮定する。つまりそれを望遠鏡、顕微鏡、またはそれに類似したものとして考える。」(157頁)

望遠鏡というのは、遠くに小さく見えている外界のあり方を、大きく拡大して見えるようにする道具であり、顕微鏡は近くにあっても小さくしか見えない外界のあり方を、より大きく見えやすくする道具である。いずれも、小さく見えているものを、大きく見えるようにするものである。フロイトにとっての「精神装置」というのは、小さくしか見えない、

つまりよく分かっていない精神のあり方を、より明確に理解していくための一つの「道具」と見るものである。

私達からすると、脳細胞というのは「生理的な活動をしている実体であると同時に、外界の刺激を認識する精神活動を営んでいる特殊な細胞」²⁾と基本的に捉えることが出来る。すなわち、身体のあり方を統括する生理的活動と、脳細胞に像として結ばれる認識としての精神活動を二重的に行っているものとしてである。それゆえ「精神装置」など、殊更必要としない。脳細胞の働きで十分理解出来る。けれども、フロイトにとってはそれが必要だったのである。

「われわれは、自分たちが精神Psyche（あるいは精神生活）と呼ぶものについて二種類の系列を知っている。第一のものは、身体器官とその舞台である脳（神経系統）、第二のものは意識活動である。この意識活動は、直接に与えられるものであって、どんな記述方法でも、それ以上は理解不可能な究極的なものである。この二系列の間に介在しているものは、すべてわれわれには不明である。」(157頁)

すなわち、「意識活動」と呼ばれている精神活動と脳の関係とが明らかになっていない故、精神活動を営む「精神装置」というのを考え出さなければならなかったというのである。これは、脳細胞とは別物としての「精神装置」を仮定する必要があったのであり、ここにフロイトなりの独創があったと言える。それは「精神とは何か」に直接答を出すものではないにせよ、それを分かっていくための「仮説」を設定したということである。

そして彼の「学説」は、すべてここから始まり、ここに収斂することとなる。とは言え、そのような装置を仮定するにしても、そこにはフロイトなりの実践が根本にある。

「この精神装置についての知見が獲得されたのは、人間の個人的発達の段階が研究されたことによってである。この精神装置の中で最も古い精神的区画、または『場』をわれわれは『エス』Esと呼ぶ。エスの内容はすべて遺伝され、出生のときにすでにその個体が持って生れ、体質的に決定されている。つまりそれは、身体的組織から発生したさまざまな本能、ここにおいてはじめてわれわれに不明な形の一つの精神的表現を見出す本能である。」(157頁)

ここにフロイト理論の本質と言えるものがある。エスと呼ばれる本能的なあり方を、精神の根本的なものと規定している点である。「精神装置」を仮定するからには、その装置の根本を規定するものが必要であり、それを本能的なあり方としたとも言えるが、フロイトの場合、彼の治療的实践によって、本能的なあり方（とくに性的なもの）が、人間の精神の根本にあると捉えた成果がここに出ている。それゆえ、それは精神装置において大事なものであり、第二章に「本能学」と展開する所以にもなっている。そのエスは次のように発展していく。

「われわれの周囲にある現実外界の影響のもとに、エスの一部分は一種特別な発達を経験する。この部分は、もともと刺激受容の器官および刺激防御の装置をそなえた皮層として形成されたものだが、やがてそれはエスと外界とを媒介する一つの特異な組織として形成される。われわれはこの領域に『自我』Ichなる名称を与える。」(157頁)

ここはちょっと分かりにくいと思われるが、要は、感覚器官を媒介にして外界と接している精神装置の部分は、外界でもなくエスでもなく、エスから相対的に独立したあり方となっていて、それを「自我」と呼ぶというのである。これは「刺激受容・刺激防御」という役目を持つという。それはどういうことか。

「自我は自己保存の任務を担っていて、その任務をはたす。詳しく説明すると、自我は外界に関しては刺激を知り、それに関する経験を（記憶の中に）貯蔵し、（逃避によって）強烈な刺激を避け、（適応により）適当な刺激は受容し、最後に、外界を合目的な方法で自我の役に立つように変化させる（積極性）。内界に対して、自我は本能要求を支配しているので、エスに対してその要求を満足させるべきか否か、この満足を外界の状況が適切になる時、適切な状態になるまで延期させるべきか、あるいは興奮をはじめから抑制すべきかを決定する。」（157～158頁）

これによると、自我は外界からの刺激をコントロールするのみならず、内界からの本能欲求をもコントロールしている、精神装置の大事な部分のようである。けれども、そのコントロールの仕方は、今流行りの「コンピュータ制御」みあいである。たとえば、「刺激を知り」「それに関する経験を貯蔵し」「強烈な刺激を避け」「適当な刺激は受容し」「外界を・・自我の役に立つように変化させる」とあるが、その過程は、あたかも自動的に行われていて、「強烈」とか「適当」というのも、その基準値があつてのことのように見える。それは、内界に対しても同様に、「満足」「延期」「抑制」といういずれかの判断が、状況に応じて機械的になされて、そこでの曖昧な選択はないようである。そこで選択に迷うこともである。人間の「自我」というのは、そのような明解なものなのか、と疑いたくもなる。

この意味で、フロイトの精神の捉え方は、「精神装置」という言葉どおり、一つの機械的なあり方を基盤にしていることは、ここからも明確である。その機械的な捉え方に、果たして人間の精神は収まりきるものかどうか、それをこれから見ていくことになる。

ただフロイトは、人間の精神を治療の対象とした結果として、エスや自我のみならず、「超自我」という概念を引き出している。これは画期的な成果と

言える。

「長い幼児期を通して成長してゆく人間は、その期間中両親に依存して生きているが、この幼児期の両親への依存性は、この時期の沈殿物として、彼の自我の中に、両親の影響が継続される一つの特別な『場』を形成する。この『場』は『超自我』überichと呼ばれる。

この超自我が自我から分離しているか、または自我に対立している限り、超自我は第三の力であつて、自我はその力を考慮しなければならない。」（158頁）

ここで「超自我」と言われているのは、現代的には「規範」と呼ばれるものに当たり、その行動について、「そうすべき」とか「そうすべきでない」など、人間の意志を規定する認識のことを、フロイトなりに捉えたものである。とくに「両親の影響が継続される」というように、両親からの働きかけが大きいものと捉えているのは、彼が治療した患者の「事実」から引き出してきたものと思われるが、それを「第三の力」として評価しているのは、精神の病において人間の意志の働きを重んじているという意味で、精神医学の歴史上、大きく評価されてよい。更に次のように説く。

「自我と超自我の関係の個々のものは、すべて幼児の両親に対する関係に還元することによって理解できる。両親の感化の中には、もちろんただ両親自身だけではなく、両親を通じて伝えられた家族、民族、種族の習慣の影響、ならびにそれらのものに現わされているその時代の環境の要求も作用している。なおまた、超自我は個人発達の経過中、両親につづくその延長者や代理者、たとえば教育者とか社会において尊敬される理想の人物などによつても参与を受ける。」（158頁）

このようにフロイトは、超自我という規範的な認識を、両親の影響のみならず、もっと広い社会的な影響からも捉えている。その意味でも、現実の人間

のあり方を背景にしての把握であると言える。ただ問題は、これもエスや自我と同じく、精神装置の一部と捉えられている点である。すなわち、あくまでエスという本能的なあり方（主に性的なもの）が根本にあり、そこに関わる限りでの規範的認識という規定を受けている。それゆえ狭い範囲のものでしかないということである。更には次のように述べている。

「この精神装置の一般的な図式を、精神的に人間に近い高等動物にも当てはめることができる。超自我は動物によっても、人間の場合のように、長い幼児的依存の時代がある場合には必ず認められ、同時に自我とエスの区別が必然的に認められるのである。」
(158～159頁)

ここでフロイトは、超自我という規範的認識を、「人間に近い高等動物」に延長している。そこでは

人間と他の動物との違いというのが、明らかでなくなってしまう。人間と動物の違いは、どんなにそれが「人間に近い高等」に見えるにしろ、動物はあくまで「本能」という決められたあり方に即し、いわば受動的に生きているのに対して、人間は本能から相対的に自由になった「意志」という、能動的な認識を持って生活している³⁾。それが社会における規範的認識を創りだし、それにより社会が創り変えられていき、その結果として、現代の社会に至る「人間の歴史」が創られている。

それゆえ、人間と動物との違いをしっかりと付けることが必要なのだが、フロイトにはそれがない。それはひとえに、フロイトが「本能論」の立場にあるからである。すなわち、人間の精神の根本を「本能」に置いてしまうと、人間と動物との区別がつけられない。これがフロイトの一つの限界であると言える。この「本能論」については、次回に説くことになる。

引用・参考文献

- 1) 布施裕二：「統合失調症」についての諸問題，宮崎県立看護大学研究紀要，4(1)：1－7，2004.
- 2) 薄井坦子：科学的看護論，第3版，138，日本看護協会出版会，1997.
- 3) 前掲書2)，38.

What Academic Achievement did Freud Leave ?

—Restoration of Freudian Theory—

Yuji Fuse

【Key words】 psychoanalytic psychotherapy, psychic apparatus, instinct theory, superego